様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ００６０３

研究課題名（和文）『哲学雑誌』のアーカイヴ化を基礎とした近代日本哲学の成立と展開に関する分析的研究

研究課題名（英文）Studies on the Formation and Development of Modern Japanese Philosophy based on Archiving Project of the "Tetsugaku-zasshi"

研究代表者
鈴木　泉（SUZUKI, Izummi）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：５０２３５９３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、1884年に東京大学文学部において発足した日本最古の哲学系の学会「哲学会」の学会誌『哲学雑誌』のアーカイヴ化とその分析を基礎としながら、近代日本哲学の成立と展開を、1/西洋哲学の導入、2/哲学という学問の制度化、3/大森荘蔵・井上忠・黒田亘・廣松渉・坂部恵ら「哲学会」と『哲学雑誌』に縁の深い戦後日本を代表する哲学者たちの哲学に関する系譜学的探求、以上三点から解明した。これらの研究を通して、現在の日本において哲学することの意義について幾つの基礎的な展望を獲得した。併せて、研究者への資料提供の便宜を図るべく、発刊以来の『哲学雑誌』のウエッブ上での公開の準備を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　近代日本哲学は、これまで京都学派と同一視される傾向にあったが、その発生と展開については、西洋哲学の導入と戦後の日本哲学の展開に際して、東京大学において発足した「哲学会」とその学会誌『哲学雑誌』が大きな役割を果たしたのも事実である。これまで総体としては明らかにされてこなかったこのような側面に光をあて、近代日本哲学を複数の線において描くことによって、近代日本哲学の可能性の豊かさを示すとともに、その基礎資料を一般市民に公開することを通して、近代日本思想研究に寄与する。

研究成果の概要（英文）：On the basis of archiving and analyzing the journal Tetsugaku-Zasshi of “Tetsugakukai,” the oldest Japanese academic society of philosophy, which was founded in 1884 in the Faculty of Letters of the University of Tokyo, this research clarified the establishment and development of modern Japanese philosophy from the following three perspectives: the introduction of Western philosophy, the institutionalization of the discipline of philosophy, and the genealogy of philosophy by representative postwar Japanese philosophers closely connected with “Tetsugakukai”, including Shozo Omori, Tadashi Inoue, Wataru Kuroda, Wataru Hiromatsu and Megumi Sakabe. Through these studies, we have gained new insights into the formation and development of modern Japanese philosophy, as well as some basic perspectives on the future of studying philosophy in Japan today. At the same time, we have made preparations to publish the text of the Tetsugaku-Zasshi on the web for the convenience of researchers.

研究分野：哲学

キーワード：哲学会　『哲学雑誌』　東京学派　井上哲次郎　桑木厳翼

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近代日本を代表する最大の哲学運動が西田幾多郎・田邊元・三木清らに代表される京都学派であることは疑いがなく、近年、京都学派に関する研究は内外問わず新たな興隆を迎えている。他方、大森荘蔵から坂部恵に至る戦後の日本を代表する独自な思索を産み出した哲学者の幾人かが東京大学出身かつその教員であったこともまた事実である。後者に関して、共通の師や運動としての共通性を見出すことは困難であるので、それを「東京学派」と呼ぶことは困難だが、戦後の日本を代表する大森荘蔵から坂部恵に至る独自な哲学者の思索を引き継ぐようにして思索の営みを形成してきた哲学者は数多い。さらに、近代日本哲学の形成が語られるときに、西周らの最初期の思想家に次いで、本邦のアカデミズムの内部において哲学が確固とした地位を形成するにあたって大きな役割を果たした、フェノロサとケーベルといった「外国人教師」や『哲学字彙』の著者の一人である井上哲次郎について論じられることは多いが、彼らが教師として身を置いた東京大学という場所において、その後、哲学がどのように教育・研究がなされ、どのような哲学が生み出されていったのか、ということに関する本格的な研究は存在しない。明治初期の哲学の導入期と戦後という二つの時期を除いて、特色ある哲学は東京大学からは生み出されなかったように遇されている。

しかしながら、西田や田邊が学生時代に東京大学に身を置いたことは別にしても、官学アカデミズムの一つの中心であった東京大学から、戦前においても多くの哲学者・哲学研究者（上記以外に、波多野精一・九鬼周造・和辻哲郎・岩下壮一・高橋里美等）が輩出したことは事実であり、そこに幾つかの標語で括ることの可能な共通した哲学運動を明確な仕方で見いだすことは難しいにしろ、京都学派との様々な横断的かつ縦断的交流を有しつつも、戦後に至るまでの幾つかの独自な哲学の系譜が予想される。私たちは井上哲次郎と大森荘蔵とを繋ぐ、東京大学、あるいは「哲学会」や『哲学雑誌』という場において形成されてきた哲学の展開に関して、あまりに無知なのである。

近代日本の哲学の展開に関する以上のような研究状況については、以前から、本研究課題の研究代表者と研究分担者の一部によって自覚されていたが、或る経緯から研究室所蔵の『哲学雑誌』を全面的に整理・保存する過程において、本格的な研究の必要性が改めて強く実感され、その基礎的な作業として『哲学雑誌』のアーカイヴ化の作業を始めるに至り、さらに、それに留まらずに、本研究のような綜合的かつ分析的な研究を着手することになった。

２．研究の目的

本研究は、1884年に東京大学文学部において発足した日本最古の哲学系の学会「哲学会」の学会誌『哲学雑誌』（1887年に『哲学会雑誌』として発刊、1892年に『哲学雑誌』に改題。以下『哲学雑誌』と総称）のアーカイヴ化とその分析を基礎としながら、近代日本哲学の成立と展開を、

(1)（特に戦前における）西洋哲学の導入、

(2)哲学という学問の制度化、

(3)大森荘蔵・井上忠・黒田亘・廣松渉・坂部恵ら「哲学会」と『哲学雑誌』に縁の深い戦後日本を代表する哲学者たちの哲学に関する系譜学的探求、

以上三点から解明することを通して、近代日本哲学の成立と展開に関する新たな知見をもたらすとともに、現在の日本において哲学することの意義と今後のありようについての基礎的な展望を獲得することを目的とする。併せて、発刊以来の『哲学雑誌』全文のウエッブ上での公開を通して、近代日本思想に関心のある研究者への資料提供の便宜を図る。

３．研究の方法

本研究は、具体的には次の四つの作業を通して遂行された。

(1)『哲学雑誌』のアーカイヴ化：（キーワードを付した）総目次の作成などの基礎的作業を行った上で、（東京大学文学部の）ウエッブ・サイト上での公開の準備を進めた。

(2)（特に戦前における）西洋哲学の導入の模様の検討：(1)の基礎作業をもとに、西洋哲学の輸入・導入の濃淡について分析を行い、その特色を解明した。次いで、戦前の哲学（史）研究の水準と特色を解明するべく、研究代表者・研究分担者はそれぞれ、古典的な哲学者に関する論文の調査・検討を進めた。

(3)人文学における哲学という学問の制度化：同じく(1)の基礎作業をもとに、哲学の自立化の過程について、東京大学文学部の学科や講座の編成という制度上の変革と併せて分析を行った。

(4)戦後日本を代表する哲学者たちの哲学の系譜学的探求：研究代表者・研究分担者は、それぞれ、以下の哲学者を対象とする系譜学的探求を遂行した（坂部恵と廣松渉、黒田亘と岩崎武雄、池上鎌三と高橋里美、井上忠と出隆、大森荘蔵）。他に、ここに挙げた以外の哲学者の独自な思索の萌芽を戦前の論説に探るとともに、京都学派との横断的かつ縦断的関係を精密に辿った。

以上の研究成果は、年次毎に持ち寄り相互検討すると共に、年一度程度大きめの研究会・シンポジウムを開催した。さらに、東京大学大学院人文社会系研究科の「多分野交流演習：戦前の『哲学雑誌』を読む」を活用し、関係諸分野の大学院生と共に毎年毎の研究課題の解明の実験室とした。

４．研究成果

四年次にわたって実施された本研究課題の研究成果は、以下の通りである。「研究の方法」に記した四つの作業毎に取り纏めた上で、残された課題などを付記する。

(1) 『哲学雑誌』のアーカイヴ化：（キーワードを付した）総目次の作成などの基礎的作業を概ね終えることが出来た。それぞれの情報に関しては、研究室のホームページ上で、公開済みである（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/philosophy/seika.html）。他方、基礎的資料となる『哲学雑誌』のデジタル化に関しては、既に或る時期までのデジタル資料を有している国立国会図書館との協議を行い、著作権の問題をクリアして、2022 年度秋には公開を予定している。

(2)戦前における西洋哲学の導入の模様に関して、(1)の基礎作業をもとに分析を行い、10 年ごとの特色の解明を遂行することが出来た。さらに、その個別の事例として、井上哲次郎と桑木厳翼のとりわけカントとカント学派の仕事について集中的な検討を行った。また、戦前の哲学（史）研究の水準と特色を解明するべく、スピノザ、ライプニッツ、 ヘーゲル、現象学と新カント学派、さらにプラトン等に関する研究の水準に関する検討を順に行った。そこから浮かび上がるのは、桑木厳翼による哲学史的な作業の特色であり、厳密な原典読解と健全な「批評主義」とでも言うべきその研究と哲学者としての姿勢が、戦前の哲学会と『哲学雑誌』の哲学の模範となったという事実である。

(3)人文学における哲学という学問の教育と研究の制度化に関しても、(1)の基礎作業と学内の資料をもとに、哲学の自立化の過程を軸に、宗教学・社会学などの他専修との関係なども配慮しながら、東京大学文学部の学科や講座の編成という制度上の変革の意義と併せて、分析の基礎作業を行い、或る種の知識社会学的分析を遂行し、戦後に至るまでの教員の配置と講座の編成の概ねを把握するに至った。さらに、若手の研究者の参加によって、宗教学・仏教学・中国哲学それぞれにおける戦前の『哲学雑誌』を舞台とした人文学に関する新たな展望を得ることが出来たのは大きな成果であった。つまり、狭義の意味における哲学に留まらない人文諸学が、『哲学雑誌』をある種の＜アゴーン＞としてその理論的展開がなされたことが浮き彫りにされたのである。

(4)戦後日本を代表する哲学者たちの哲学の系譜学的探求に関して、とりわけ、研究代表者鈴木は、出隆と波多野精一、池上鎌三と廣松渉について、研究分担者納富は大西祝、そして、出隆について、それぞれ集中的な検討を行った。スピノザの受容と日本における宗教哲学の展開にとっての波多野精一の重要性が、京都学派、さらには戦後の上田閑照に至る系譜との関係におけるそれと共に自覚されたことの意義は大きい。また、廣松渉の四肢的構造論を核心とする関係論的存在論にとって、その一つの背景をなす池上鎌三の知識論の与えた微妙な影響関係が確認されたことも大きかった。

(5) 最後に、哲学会と『哲学雑誌』を舞台に形成されてきた近代日本哲学の（京都学派とは異なる）系譜を総体としてどのように位置づけるかという最重要の論点に関して、東京学派/東京スタイル/東京アリーナという視点との関わりにおいて桑木厳翼のフラットにして批評的な哲学のスタイルの重要性が自覚されたことは、(2)と関わるが極めて大きな研究成果であった。（桑木厳翼に関しては、桑木や新カント学派に詳しい専門的研究者を複数招いて、共同シンポジウムを開催した。）さらには、桑木の存在が一つの理由となって、京都学派ほどには戦争の傷跡を受けずに済んだ東大系の哲学者たちの時局への沈黙の意味、そして、傷跡が戦後に積極的に表明されることになるという意味で例外的な存在の出隆の軌跡の意義を、それぞれ主題化することとなった。また、未だ仮説に過ぎないが、その反動として戦後における東京学派/東京スタイル/東京アリーナの哲学のオリジナルな展開を位置づける、という仮説が提起された。戦争の傷跡の有無が、戦後における京都大学と東京大学の哲学の展開の違いを逆説的に規定しているように思われるのである。

(6)しかしながら、コロナ禍、さらには、研究代表者の鈴木が 2021 年 7 月に大怪我に遭遇し、三ヶ月ほど入院生活を余儀なくされたために、計画されていた作業の全てを十分に実施することは残念ながら出来なかった。コロナ禍の当初は研究会の開催を始めとして問題が生じ、また、図書館が閉鎖された時期もあったために、研究が十分に進められなかった面が否めないし、鈴木の怪我によって、哲学会関係者へのインタヴューを、本研究課題期間の間には実施することが出来なかった。取りこぼした主題としては、(2)と(4)を構成する個別の研究対象の他、特に、①フェノロサ、ケーベル、さらには、近年研究の進んでいるブッセ等々のいわゆる「お雇い外国人」の教育と影響の内実に関する研究、②東京学派/東京スタイル/東京アリーナと呼ぶことの出来る戦後日本の哲学の動向の一つを、東アジアの哲学の中に位置づける作業、が挙げられる、これらについては、前記「多分野交流演習」などを活用して、その欠を補い、さらには引き続き研究会と学会の開催を通して検討を進める予定である。それらを受けて、研究全体の最終成果については、論文集・資料集として（哲学会設立 140 周年を迎える）二年後の 2024 年に刊行するべく、現在その具体的な計画・準備を進めている。

以上の研究は、個別にはそれぞれの場で進められているが、哲学会と『哲学雑誌』という共通の場を統一的な軸とする規模の研究はこれまで行われておらず、研究成果が総体として公開された場合、極めて大きなインパクトを有するものと自負している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計20件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 鈴木泉	４．巻 133
２．論文標題 経験の構造を論じることについて――松永哲学をめぐるシンポジウムの余白に――」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 哲学雑誌	６．最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 納富信留	４．巻 14
２．論文標題 アリストテレスのプラトン「イデア論」規定 ―『形而上学』A6，987b7-10再考―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 フィロロギカ	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 納富信留	４．巻 13
２．論文標題 ハイデガーとプラトンの対決	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Heidegger-Forum	６．最初と最後の頁 77-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 古荘真敬	４．巻 第133巻第806号
２．論文標題 「エレメント」を問うとは、どういうことか――松永澄夫著『経験のエレメント』をめぐって	５．発行年 2019年
３．雑誌名 哲学会編哲学雑誌『経験の構造』	６．最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野村智清	4．巻 別冊13巻
2．論文標題 Society5.0とa nation of men blind from their infancy	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国際哲学研究	6．最初と最後の頁 57-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 一ノ瀬正樹	4．巻 2019年冬号
2．論文標題 イノベーションは何のために －SDGsを見据えた哲学的一考察	5．発行年 2019年
3．雑誌名 人間会議	6．最初と最後の頁 186-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 一ノ瀬正樹	4．巻 34
2．論文標題 ロック言語論と「プライベート性」の問題	5．発行年 2020年
3．雑誌名 龍谷哲学論集	6．最初と最後の頁 3-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 一ノ瀬正樹	4．巻 10
2．論文標題 バークリの数学論－幾何と算術のゆらぎをめぐって－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要　The Basis	6．最初と最後の頁 79-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 一ノ瀬正樹	4．巻 43
2．論文標題 「思考実験」から「知識の新因果説」へ－ウィリアムソンの議論に即して－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 イギリス哲学研究	6．最初と最後の頁 5-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 乗立雄輝	4．巻 創刊号
2．論文標題 始まりがないことについて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ひとおもい	6．最初と最後の頁 217-258
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 乗立雄輝	4．巻 第133巻第806号
2．論文標題 経験と反復	5．発行年 2019年
3．雑誌名 哲学雑誌	6．最初と最後の頁 85-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 平岡紘	4．巻 1
2．論文標題 〈自己への現前〉から〈自己のもとでの現前〉へ――レヴィナスにおける自己性の問いをめぐって――	5．発行年 2019年
3．雑誌名 レヴィナス研究	6．最初と最後の頁 54-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 富山豊	4．巻 16
2．論文標題 現象学の二つのノルマ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 フッサール研究	6．最初と最後の頁 135-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 富山豊	4．巻 16
2．論文標題 『論理学研究』におけるふたつの反心理主義――植村玄輝『真理・存在・意識：フッサール『論理学研究』を読む』を読む	5．発行年 2019年
3．雑誌名 フッサール研究	6．最初と最後の頁 217-227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 板橋勇仁	4．巻 23
2．論文標題 ショーペンハウアーにおける宗教と科学	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ショーペンハウアー研究	6．最初と最後の頁 68-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 板橋勇仁	4．巻 18
2．論文標題 科学の共同性と宗教ーC.S.パースを手掛かりにして	5．発行年 2018年
3．雑誌名 プロセス思想	6．最初と最後の頁 39-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 一ノ瀬正樹	4．巻 1139
2．論文標題 高校新科目「公共」についての哲学的覚え書き	5．発行年 2019年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 139-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 一ノ瀬正樹	4．巻 9
2．論文標題 死の害についての「対称性議論」をめぐって －因果概念に照らしつつ－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis	6．最初と最後の頁 105-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 一ノ瀬正樹	4．巻 4(1)
2．論文標題 リズムの時間遡及的本性についての哲学ノート －「音楽化された認識論」への小さなインタールード－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 フィルカル	6．最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 平岡紘	4．巻 34
2．論文標題 引き裂かれた現在――レヴィナスのフッサール『内的時間意識』の解釈をめぐって――	5．発行年 2018年
3．雑誌名 現象学年報	6．最初と最後の頁 161-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計33件（うち招待講演　16件／うち国際学会　18件）

１．発表者名 Noburu Notomi
２．発表標題 "Likeness" in Plato's Sophist and Parmenides
３．学会等名 TORCH ‘ Image and Thought ’ Network Seminar（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Noburu Notomi
２．発表標題 Protagoras' On Gods: its context and an open tradition
３．学会等名 Princeton Classical Philosophy Conference（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 明治思想と西洋哲学
３．学会等名 東亜人文社會科學研究的地平線―人物、文化、思想、海洋與経済的交匯（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Noburu Notomi
２．発表標題 Greek Philosophy in the context of World Philosophy: on universality
３．学会等名 第6回中日哲学フォーラム（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Noburu Notomi
２．発表標題 Homonymu and Likeness in Plato’s Parmenides
３．学会等名 The 11th Symposium Platonicum（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Noburu Notomi
２．発表標題 Protagoras and the Sophists on Truth
３．学会等名 Conferece: Truth and Relativism in Ancient Philosophy（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 大西祝の批評主義から見る『哲学雑誌』
３．学会等名 第36回日本哲学史フォーラム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 野村智清
２．発表標題 Let others think for you: Berkeley and Assent
３．学会等名 UK-Japan Special Conference: Aspects of Early Modern British Philosophy（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 一ノ瀬正樹
２．発表標題 高校新科目「公共」について－哲学の視点から－
３．学会等名 令和元年度　都倫研第一回研究例会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 一ノ瀬正樹
２．発表標題 Thought Experiments, Counterfactuals, and Knowledge: From Williamson Onwards
３．学会等名 Tokyo Forum for Analytic Philosophy（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 一ノ瀬正樹
２．発表標題 Locke on language and its privateness
３．学会等名 UK-Japan Special Conference: Aspects of Early Modern British Philosophy（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 一ノ瀬正樹
２．発表標題 On Infinite Regress in Hume's Theory of Causation
３．学会等名 Various Shapes of British Thought and Philosophy---Centering on Enlightenment and Common Sense Philosophy（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 一ノ瀬正樹
２．発表標題 人と動物のつながり？ ―ハチ公、けれど鳥獣害
３．学会等名 東京大学朝日講座『つながりから読み解く人と社会』（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 哲学の普遍性
３．学会等名 第5回東京大学・全南大学哲学科学術交流シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 アリストテレスのプラトン「イデア論」規定再考―『形而上学』A6，987b7-10―
３．学会等名 第17回フィロロギカ研究集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 ハイデガーとプラトンの対決
３．学会等名 ハイデガー・フォーラム第13回大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Noburu Notomi
２．発表標題 Thinking of the Ideas from the East
３．学会等名 4th Conference on Contemporary Philosophy in East Asia (CCPEA2018)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Noburu Notomi
２．発表標題 How Modern Japanese People Read Plato’s Politeia
３．学会等名 International Symposium: Plato, his Dialogues and Legacy（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Noburu Notomi
２．発表標題 Thinking of the Ideas from the East
３．学会等名 International Conference: Plato’s Philosophy in Interdisciplinary Context（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Noburu Notomi
２．発表標題 Why Soul Matters: Reconsidering the Philosophical Contexts of Plato’s On Soul
３．学会等名 Forming the Soul: Plato and his Opponents - 2nd Asia Regional Meeting of the IPS（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yutaka TOMIYAMA
２．発表標題 Husserl's theory of meaning and language acquisition: in contrast with Dummett's manifestation argument
３．学会等名 Phenomenology in Cross-Cultural Perspective（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 一ノ瀬正樹
２．発表標題 高等学校新科目「公共」を考える－哲学・倫理学を生かすために－＜導入＞
３．学会等名 日本哲学会第77回大会・哲学教育ワークショップ
４．発表年 2018年

１．発表者名 Masaki Ichinose
２．発表標題 A Mystery and Irony in Hume's Theory of Causation
３．学会等名 Special Conference on Hume and Locke（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Masaki Ichinose
２．発表標題 Late birth and early death: A consideration about the symmetry argument on death
３．学会等名 The 4th Conference on Contemporary Philosophy in East Asia（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 一ノ瀬正樹
２．発表標題 「予防原則」と「前進原則」－科学技術に対する規制と推進の対比をめぐって－
３．学会等名 第26回「メタ科学技術ワークショップ」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 一ノ瀬正樹
２．発表標題 「考える」ことをめぐる三つのコントラスト
３．学会等名 日本学術会議第一部会哲学委員会哲学・倫理・宗教教育分科会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Masaki Ichinose
２．発表標題 On Human Rights of Dead People
３．学会等名 International Conference: Human Rights and Human Security. Achievements and Challenges. The 70th Anniversary of the Universal Declaration of Human Rights（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 一ノ瀬正樹
２．発表標題 ロック言語論と「プライベート性」の問題
３．学会等名 龍谷哲学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 一ノ瀬正樹
２．発表標題 福島における震災関連死とその周辺の問題をめぐって －哲学の視点から－
３．学会等名 第50回原子力安全に関する特別セミナー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 一ノ瀬正樹
２．発表標題 原子力災害といのちの保全 －哲学の視点から－
３．学会等名 日本原子力産業協会、輸送・貯蔵専門調査会第96回(2018-6)定例会合（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 一ノ瀬正樹
２．発表標題 死者の幸福は語りうるか
３．学会等名 第二回Shiawase学会(Shiawase3.0)（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masaki Ichinose
２．発表標題 Williamson on Thought Experiments
３．学会等名 Japanese Society for British Philosophy, the 43rd Annual Conference
４．発表年 2019年

１．発表者名 野村智清
２．発表標題 バークリと信仰
３．学会等名 工学・脳科学をエビデンスとした社会的基盤概念と価値の創生 第１回研究
４．発表年 2019年

〔図書〕　計11件

１．著者名 納富 信留	４．発行年 2019年
２．出版社 NHK出版	５．総ページ数 240
３．書名 プラトン哲学への旅	

１．著者名 プラトン、納富信留	４．発行年 2019年
２．出版社 光文社	５．総ページ数 336
３．書名 パイドン	

１．著者名 宮園 健吾、大谷 弘、乗立 雄輝、野村智清	４．発行年 2020年
２．出版社 武蔵野大学出版会	５．総ページ数 396
３．書名 因果・動物・所有 一ノ瀬哲学をめぐる対話	

１．著者名 青木　裕子、大谷　弘、野村智清	４．発行年 2020年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 232
３．書名 「常識」によって新たな世界は切り拓けるか	

１．著者名 Nicolas de Warren, Shigeru Taguchi, Yutaka Tomiyama	４．発行年 2019年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 184
３．書名 New Phenomenological Studies in Japan	

１．著者名 宮園 健吾、大谷 弘、乗立 雄輝、一ノ瀬正樹	４．発行年 2020年
２．出版社 武蔵野大学出版会	５．総ページ数 396
３．書名 因果・動物・所有 一ノ瀬哲学をめぐる対話	

１．著者名 Luca Pitteloud, Evan Keeling, Noburu Notomi	４．発行年 2019年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 143
３．書名 Psychology and Ontology in Plato	

1．著者名 Gabriele Cornelli, Thomas M. Robinson, Francisco Bravo, Noburu Notomi	4．発行年 2018年
2．出版社 Academia Verlag	5．総ページ数 407
3．書名 Plato’s Phaedo: Selected Papers from the Eleventh Symposium Platonicum	

1．著者名 Nicholas D. Smith, Noburu Notomi	4．発行年 2018年
2．出版社 Bloomsbury Academic	5．総ページ数 267
3．書名 Knowledge in Ancient Philosophy, The Philosophy of Knowledge: A History, Volume I	

1．著者名 ミツヨ・ワダ・マルシアーノ、一ノ瀬正樹	4．発行年 2019年
2．出版社 法政大学出版局	5．総ページ数 378
3．書名 〈ポスト3.11〉メディア言説再考	

1．著者名 一ノ瀬 正樹	4．発行年 2018年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 368
3．書名 英米哲学入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

科研費研究成果 http://www.l.u-tokyo.ac.jp/philosophy/seika.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	納富　信留 (NOTOMI Noburu) (50294848)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	乗立　雄輝 (NORITATE Yuki) (50289328)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授 (12601)	
研究分担者	古荘　真敬 (FURUSHO Masataka) (20346571)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	榊原　哲也 (SAKAKIBARA Tetsuya) (20205727)	東京女子大学・現代教養学部・教授 (32652)	
研究分担者	一ノ瀬　正樹 (ICHINOSE Masaki) (20232407)	武蔵野大学・人間科学部・教授 (32680)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	板橋　勇仁 (ITABASHI Yujin) (30350341)	立正大学・文学部・教授 (32687)	
研究分担者	朝倉　友海 (ASAKURA Tomomi) (30572226)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	相松　慎也 (AIMATSU Shinya) (50908829)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教 (12601)	
研究分担者	平岡　紘 (HIRAOKA Ko) (00823379)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・研究員 (12601)	
研究分担者	富山　豊 (TOMIYAMA Yutaka) (60782175)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・研究員 (12601)	
研究分担者	野村　智清 (NOMURA Tomokiyo) (90758939)	秀明大学・学校教師学部・講師 (32513)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関